

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO.29 41泊66日、うち日帰り9日／2019年



沖縄水勉強会で

5回の講演



マンダレーで見たスーチー支持の看板



ヤンゴン中心市街地の裏通り

定期刊行物に従事していると、新年を迎えて気持ちを新たにしたい、という心境にはなれないものである。読者には「新年」を感じて貰えるような企画を立てなければならないが、年明けには新年号が読者の手元に届くスケジュールで活動しなければならず、慌しい。年末年始には印刷業界が休暇に入るから、ふだんより1週間、締め切りが前倒しされることになる。月刊誌の場合、発行の日付にもよるが、印刷機を稼働させ刷了・製本と発送作業日を確認すると、25～26日前後が作業の限度となる。普段なら月末ぎりぎりまで校正作業を引き延ばすことができるものが、締め切りの前倒しにより日程は厳しくなる。

加えて、年明けは賀詞交換会など何かと新年のイベントがあり、平常の勤務に戻るのとは中旬以降となる。中旬以降から2月号の企画・取材・入力に取り掛かっても間に合わないので、入力作業時間は年が明けてから確保できるとしても、企画立案・取材は12月中に済ませておかなければならない。つまり、1週間か10日間余りの休暇はあっても、意識の上ではずっと日時の流れが継続しており、「新年」「節目」という意識は持ちにくい、と言うより、持っていないのは商売にならない。

ただでさえそういう業界にいるというのに、2019年12月は10日から15日まで、4泊6日の日程でミャンマーのヤンゴンとマンダレーの取材に出かけることになった。東南アジアではミャンマーとインドネシアを訪問したことがなく、ミャンマー訪問はかねてからの希望だった。ミャンマーでは、複数のJICAプロジェクトが実施されており、そのうち「ヤンゴン市開発委員会水道事業改善プロジェクト」が2020年7月、5年間の計画期間が終了するので、プロジェクトの終了前に、是非、現地の模様を取材しておきたかった。

このツアーは「WaQuAc-Net」（アジア水道水質協同ネットワーク、山本敬子氏）によるもので、会員はJICA専門家を中心に海外の水道に関心を持っている個人が参加している。会員数は国内68人、海外77人に上っている（2018年）。ミャンマーツアーには現地で活動している会員やJICA専門家らの合流も含め12人が参加し、時には20人を超す会食もあった。

私は元々、香辛料が効いたインドシナ半島の食べ物は非常に好みであり、ロヒンギャ問題とアウン・サン・スーチーの動向が世界の注目を集めているということもあり、喜んで出かけていった。しかし、問題は帰国後にあった。月刊「コア」でもたびたび紹介している「沖縄水勉強会」の第5回講演会が12月17日にあり、メイン講師は三本木徹氏（元厚労省水道課長）をお願いして快諾頂いたところまでは良かったが、毎回、自身が「前座講演」を行っているうえ、講演当日の午前中には県企業局で座談会をセッティングしたこともあり、帰国翌日にはどうしても沖縄・那覇に移動しなければならなかった。フライトで大きなトラブルがなければこなせる日程だと考えており、予定通り日程を消化することが出来たが、何しろ、定期刊行物従事者である。

11月から月刊「コア」の12月号（北大・白崎伸隆准教授ら）はもとより、1月号（北里大学・清和成教授）や日本水道新聞の正月号（丹保憲仁先生寄稿）を手配したり、2月号（京大・田中周平准教授）のインタビューを年末ぎりぎりにセットするという、我ながら精勤ぶりだった。平均健康年齢とやらを過ぎて体力を失い、今やアルコールに対する耐性もほとんどなく、「急性膵炎発症、間違いなし」と医者から太鼓判を押されるドロドロ血液（血中中性脂肪値995、膵炎との因果関係が強いらしい）の体としては、これを乗り切るには、酒断ちしかないと言われながら思考し、11月は月の半分の15日間、1滴も摂取しないという怪挙に打ってでた。

年甲斐もなくこれを自慢げに語れる知能は、相当レベルが低いと認識しているものの、酒の楽しみだけで生きて来た者としては大英断なのである。

ミャンマー～沖縄は特殊な日程だったが、そう言えば、2019年はどれ位、出張していたのだろうか？結果は25地域、41泊66日、うち日帰りが9日だった。つくば市の国環研（大野浩一拠点長）は少し迷って出張扱いとし、相模原市の北里大学は出張外とした。出張扱いと言っても、自分で自分に手当を支払う訳ではない。気持ちの問題だけの話である。そう言えば、ということでもう1つ、今年は何年だったと、押し詰まった30日に気が付いた。団塊の世代1回生も2020年は73歳かあ、である。